

☆練馬区教育委員会教育長賞

『その一冊は期待の証』

練馬区立大泉学園中学校 三学年 染谷 木菜

全ての小中学校の教科書にはこんな言葉がある。「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

私がこのことを知ったのは、ある日の先生とクラスメイトの会話がきっかけだった。一人のクラスメイトが教科書を粗末に扱っていると、先生が「教科書の裏に書いてあるように、この教科書にはみんなへの期待があつて税金によって無償で配られているから大切にしないさい。」と言った。小学校に入学してからいつも当たり前のように目の前にあつた教科書。そんな教科書が税に関係しているとはどういうことなのか。このとき、初めて「税」に関して関心が芽生えた。

この作文を書くにあたって教科書の無償化の歴史を調べていると、明治時代に「学制」が始まってから敗戦後十五年近く経つまで、教科書は無償ではなかった、という記事を見つけた。当時、差別を受けていた被差別部落の母親達は仕事に恵まれず、一日働いて三百

円という厳しい状況の中、当時の小学校の教科書は七百年、中学校の教科書は千二百円で親達にとってはかなりの負担だったという。

そこで、母親達は学校の教師と共に憲法を学習し、「能力に応じて等しく教育を受ける権利を有する」ということを学び、これを無償とする権利を求めて働きかけをした結果、義務教育での教科書の無償化を実現させた。今、

自分達が無償で教科書を使っているその背景には、差別と貧困で苦しめられてきた被差別部落の人々のこのような戦いがあつたのだ。この記事を読んで、無償で教科書を使っていることは普通ではないということを再認識した。

自分達がこうして無償で教科書を使えているのは誰もが平等に「勉強して良い権利」をもっているということだ。今となつては生まれた環境による差別が無く誰もが勉強できる権利を享有している。そして、その分誰もが期待されている未来の社会を担う一員として自覚をもつべきだということでもあると思

う。今現在では高校の授業料の無償化など更なる教育の促進が進んでいる。そんな大人達の試みは私達学生にとって、とてもありがたいことだ。だから私は、この教科書に込められた期待の思いや願いを受け取って、将来、また次の世代にとって良い教育が受けられる機会や環境を整えるための「税」を納められる大人になりたいと思う。